

4章 海外事例の比較検証とアセスメント策定の留意点

第一部末にオーストラリア及び米国の訪問大学から得た情報を概括するとともに、標準テストの普及を中心に情報を比較した。オーストラリアのGSAの受検者数の減少はすでに記述したとおりである。一方、米国の大学では、今後の状況はまだ推し測れないが、ラーニングアウトカムを測定するために、現状では2割ほどの大学がCLA、MAPP、CAAPなどの標準テストを採用しており、漸増している。

この2つの地域の普及状況の差には、事業戦略にも関わる次のような要因があると考えられる。またこれらの諸要因は、我が国において新たにアセスメントを創出し、普及していく上でも考慮に入れるべき留意点ともいえる。締めくくりとして、こうした観点に基づいたいくつかのポイントを考察した。

1. アセスメント用途の明確さ

オーストラリアのGSAの用途は、大学での教学の改善から、就職や資格取得まで幅広く想定されているのに対して、米国の標準テストは、もっぱらア krediteーションに対応するために実施されている。

オーストラリアにおけるGSAに対する批判の一つは、測定されるジェネリックスキルが学問の文脈から独立しているというものである。スキル・アセスメントの重要な要件の一つが「測定したスキルで具体的に何ができるのか」という予測可能性であるとするれば、GSAは、多様な用途を想定することで、何に対しても曖昧で適用しにくいものになってしまう可能性がある。既に大学、教員独自の教育評価が存在している状況ではなおのことといえる。

一方、米国の標準テストに対しても多様な批判はあり、複数の評価を併用しているのが常である。そうした中でも、ア krediteーションにおける教育効果の証明という目的を絞ったわかりやすい展開により、そのメリット感が浸透しやすい状況を創出しているといえるだろう。

2. 外部環境からの明確な要請

米国においては、上記したように、ア krediteーションへの対応が、アセスメント利用の強い外発的な動機づけとなっている。これに対して、オーストラリアでは利用を促進する環境からの働きかけが乏しい。

それが、大学当事者にとって好ましいと捉えられるか否かは別として、アセスメントなど新たな制度普及の重要な契機として、大学をとりまく外部環境からの明確な要請の有無が（それが例えば認証評価か、産業界からの要請か、大学を選択する受験生からの要請かはここでは問わない）、取り組み普及の重要な契機となり得る。

3. アセスメントによる質保証の可能性

オーストラリアにおいても米国においても、標準化テストに対する共通の批判点は、アセスメントにより評価する能力がカリキュラムの文脈にどのように位置づけられ、どのように教育改善につながるのか、現状ではよく分からないということであった。またその前提として、強制力がなく自由参加のテストあるが故の、結果に対する信頼性・妥当性への疑問があることも忘れてはならない。大学の教授陣は、国や大学を問わず学習評価を教育の改善につなげたいと願っている。

適切な方法を前提としたアセスメントによって、教育の質保証がどの程度達成されるのか、その可能性の如何が、標準化テストが大学界（教授陣）に理解され、受容されるのか否かのキープクターになるとも考えられる。

4. テスト機関と大学相互の活用・普及努力

また米国では、大学のボランティアな結びつきやコンソーシアムなどの中で、外部に教育効果を証明するための標準テスト活用についての取り組みが進められている。

またテスト機関も、アセスメントの結果をアクレディテーションのみならず、教育者本来のニーズである教育改善につなげるための取り組み（ワークショップやコンサルテーション等）を提供しつつある。

こうした、標準テストの有効利用を巡る、テスト機関と大学相互の活用・普及のための地道な努力は、アクレディテーションにとどまっている標準テストの可能性を、教学改善の施策開発や教員の能力開発に広げ得る。またこうした取り組み自体が、有効な社会的プロモーション活動としての意味を持つ。

5. 我が国の社会状況を踏まえたアセスメント開発目的等の明確化

本報告書第二部において整理することであるが、我が国の企業は現段階では、採用時に必要な情報として、能力として各段に重要視される問題解決能力などのジェネリックスキルの評価に関する情報や、有効な評価方法を持ち合わせていない。また一方で、アセスメントの必要性について意識が高まっているとはいえない。

しかしながら、欧米諸国と異なり、我が国では大学卒業時点で一斉に就職する。このため今後仮に、企業が採用基準としてジェネリックスキルの有無を一層重視するようになれば、就職用のジェネリックスキルを重視したラーニングアウトカム・アセスメントは、産業側の採用活動を円滑化・効率化する重要なツールとなり得るだろう。こうした意味では、ジェネリックスキルを評価する標準テストには社会的に求められる潜在的な可能性はあるといえる。

こうした就職での利用もあるし、米国流のアクレディテーションでの利用に特化するやり方もある。いずれにしても、目的のおきどころによって、アセスメントにおけるスキル定義、測定・評価の在り方は大きく異なってくると考えられる。

このような可能性を視野に含めつつ、我が国のアセスメント開発の目的をどこに置くのか、我が国なりの文脈で検討する必要があるだろう。

表 4-1-1 標準テストとその普及に係るオーストラリアと米国の比較

		オーストラリア	米国
標準テスト		GSA	CLA、MAPP、CAAP
開発経緯		国から ACER への委託	テスト開発機関と大学研究者、高等教育団体等との共同開発
主な用途		企業採用や大学での教学改善を想定。一部に職業資格取得要件としての利用。	主としてアクレディテーションへの対応、州政府への説明対応等。大学内では教学改善への適用に問題意識。
現状		採用大学が減少一途。政府が補助金で維持。	私立短期大学、州立大学を中心に普及途上（全大学の2割程度参加）
促進要因	利用に向けた外圧	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・アクレディテーション機関の審査基準として教育の効果証明求められる ・州政府からのプレッシャー ・公立大学の教育効果に係る自主的な情報収集、提供活動（VSA）
	大学側の活用努力	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業要件、単位としての組み込み等（一部） ・学習参加調査、内部開発テスト、e-ポートフォリオ等と組み合わせた包括的な活用
	テスト機関側の普及努力	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決、批判的思考力など、スキル領域を独立させてサービス開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・データを活用した教学改善に向けたワークショップ、コンサルテーションの展開（CLA、MAPP、CAAP とも） ・利用大学のコンソーシアム（例；CLA 利用団体である CIC 等）
主な問題点、批判		<ul style="list-style-type: none"> ・参加強制力がないため、代表性のあるサンプル確保難 ・学問分野の中に文脈に即して存在しているジェネリックスキルを取り出して測定することへの疑問 ・費用負担が重い 	<ul style="list-style-type: none"> ・分野の多様性を無視している ・サンプルが少なく妥当性に疑問 ・学生の参加強制力がなく結果に疑問 ・機関評価であり教育改善への活かし方がわからない ・費用負担が重い。 ・相互比較等による大学間の無益な競争や、本来の教育目的の喪失につながる懸念

（樋口 健）